

「特集・2」

# 音の書斎

真空管アンプの灯りが照らす  
アナログレコードの山

寺島靖国 「ジャズ喫茶「MEG」オーナー・ジャズ批評家」

藤岡靖洋 「ポルトレイン研究・収集者」

松下進 「イラストレーター」

安原暉善 「復刻レベル」オーナー・音復元担当

澤野由明 「ジャズレベル」澤野工房「オーナー」

吉松隆 「クラシック現代音楽作曲家」

my hiding music room  
2006

名盤と戯れ、とことん追求した音に酔う。  
ある人は過去の名演奏を語り継ぎ、ある人は最先端の音楽を創作する。  
楽しみ方も、好きなジャンルも違うけれども、音楽を深く愛することには人後に落ちない6人が、  
自分の為に作り上げた音の部屋を公開してくれた。  
それぞれがこだわり抜いた「音の書斎」を堪能してほしい。





母親に抱っこされて記念写真に収まる。1歳8カ月のときの安原さん。父親の影響もあり、この頃からすでにレコードを手伝って遊んでいた。

[オーパス蔵・音源復刻家]

# 安原暉善

文◎笹木博幸 撮影◎尾上達也

音の文化財ともいえる  
歴史的な名演奏の数々に  
往年の名機で触れる。



往年の名盤や名機が詰まる「SP・LPレコード資料蔵」は、古い町並みを残す岡山県牛窓の路地に佇む。建物は安原さんが靴中に学童疎開していた縁あって、船具蔵の提供を受けた。



昔の船具蔵を借り受け  
収集品を収める資料蔵に

「オーパス蔵」といえば、クラシックスの質の高い復刻盤CDを手掛けるレーベルとして知る人ぞ知る存在。そのキーマンこそ、自らメンテナンステキな数多くの歴史的な名器を使い分け、最良の原盤から最良の音を探り出す音復元の匠こと安原暉善さんだ。思えば、レコード収集家の父親に刺激され、童謡のレコードをねだったのは1歳半のこと。高校時代からクラシックに目覚め、広島県府中市で酒蔵の当主を務めた頃から現在に至るまでに集めたコレクションは、SPだけでも約1万枚に上る。そのほか膨大な数のLPやCDなどを収蔵すべく借り受けたのが、大正期に建てられたという船具蔵だった。瀬戸内海を望む牛窓の古い町並みの一角に、SP・LPレコード資料蔵の看板が掲げられている。



## 新旧多彩な機材を駆使し 最良の音を引き出す

「全部合わせて4万枚くらいかな。今は神戸市内の自宅から必要なレコードを取りに来たり、機材の修理に来たり。あとは月に1回、20人ほどが集まってコンサートを開いています」と安原さん。

レコードは明治後期から昭和初期にかけてのクラシックを中心に、ジャズ、民謡、流行歌などジャンルは幅広い。なかには世界で初めて録音されたベートーベン「運命」や、作曲家のサラサアテ自らがバイオリンを奏でた「チゴイネルワイゼン」といった家宝も。同時に、壁面に所狭しと並ぶ新旧のオーディオ機器が目をはひく。かつてSP復刻に用いたサンパチのオープンリールはもちろん、聴き比べて選んだCDプレーヤーのDENON「DCD1650GL」



上/手前の板型スピーカーは、家具メーカーに造らせたボードに、ナショナルの名機8PW1をはめ込んだ安原さんのオリジナル。奥のタンノイほかのスピーカーとともに、聴く楽曲などに応じて使い分けている。下/長年収集を続けてきたSPやLPレコードが天井高く壁面を埋める。



があるかと思えば、エジソンの高級モデル「チップペンデール」など各時代の蓄音機が十数台。

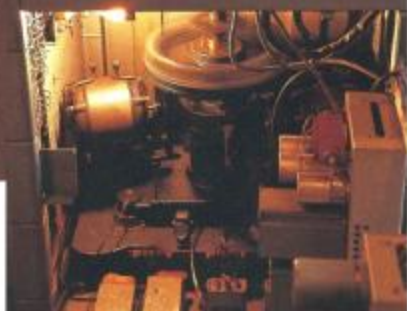
「すべて音が出るものばかり。いろんなところで見つけ、壊れていても直せそうなら譲ってもらおう。独学で弱電の勉強もしました。動くまでが大変とはいえ、音が鳴ったときが楽しいんですよ。音の復元も含め、こ

こまでやってこられたのは好きだからだけでなく、長年自分で機械の修理もしてきたから。また、自宅にはビクトロローラーのクレデンザーもありますが、蓄音機の音の質もみんな違う。SPを聴く際は、その時代の蓄音機を使うのが一番」

そう語る安原さんは、スピーカーも、例えばオーケストラにはタンノ



右/右上から時計回りに、初期の蓄音機に用いられた円筒レコードの録音管。エジソンが縦振動の円盤レコード用として1912年頃に開発した「ダイヤモンドディスク・チップペンデール」など。評価の高いトーレンスのターンテーブルTD124/II。日本の蓄音機業界の元祖・三光堂による明治末期のラッパ型蓄音機。



左/メインで使い続けているターンテーブルはDENON製で、1960年頃に放送局用として使われていたものをただ同然で引き取り、自ら修理したもの。トルクが強く回転にぶれがないため、安定した性能を発揮するという。





スピーカーセット レコード棚



イ、ギターやチャターなどには自作のものを使い分け。自分が納得できる良い音を引き出すためには、あらゆる努力を惜しまない。音復元の技巧に加え、そんな情熱が、オーパス蔵のプロデューサー役である相原了さんの心をとらえたのだろう。

「バイオリンでもピアノでも、今の演奏技術は立派です。でも、パートエクトすぎて面白みがない。SPレコードの頃の語りかけてくるような演奏が好き。東京からこの蔵を訪ねて来てくれた相原さんとも、そんな意見が一致して」

SP時代の録音は優れた演奏家たちの遺言状。今も鮮明な音を奏でる、そんな「音の文化財」を保存し、親しむ拠点がここ。のんびりとした港町に、今日も往年の名曲が響き渡る。

まるで語りかけるような、SPレコードならではの響きに魅せられて。

# 音の書齋



■オーパス蔵でくらし  
安原琢善氏のレコード蔵の話を聞き訪ねた東京在住のサクラマン相原了氏が、実際に聴いたその音に驚嘆。一念発起してクラシック音楽のSP復刻プロジェクトとして2000年に立ち上げる。レコードの溝から微細な情報まで拾い出す安原氏の職人技により、極めて再現性の高い復刻CDを実現。ノイズカットは最小限に、生々しさを追求した音が評論家、愛好家に絶賛され、立ち上げた両人が驚くほどの評判に。現在は初期のLP、ジャズの復刻も手掛けている。  
[http://www.opusking.com/index\\_j.htm](http://www.opusking.com/index_j.htm)

特産